

(令 8 法後)

小論文

- ・問題は 1 ～ 17 ページである。
- ・下書き用紙は中に 2 枚入っている。

注意 解答は答案用紙に横書きで記入しなさい。

小論文 250 点

問題文

以下の資料を読み、問1と問2に答えなさい。

問1 末尾の波線部でまとめられている著者の考えを700字以内で説明しなさい。

(配点150点)

問2 あなたが紛争と考える事例を一つ取り上げ、その解決に向けた課題を、資料で展開されている著者の議論を踏まえて300字以内で記述しなさい。なお、ここで取り上げる紛争事例は、国家間のものから身近な地域社会や組織内のものまで、また、現在のものから過去のものまで、自由に選択してかまわない。

(配点100点)

なお、資料中の見出しの一部を省略したほか、必要と思われる箇所には注の付記、表記の変更を行った。下線部は注を付記した箇所を表す。

人間は個人として身体的な存在であり、身体からの固有の視野をもつことで、異なった経験を積む。この経験が同じ事物や人びとや出来事についても多様な判断を生み出す。したがって、個人個人が異なった考えをもつことは当然のことである。意見の相違が生じ、対立が発生することには、なんの不思議もない。ただ、対立には、その程度に応じて、さまざまな段階がある。対立は論争へと、さらには、紛争へと発展し、やがて暴力に、また国家間では戦争に至ることもある。

異なった意見をもつものどうしが互いに自分の主張を譲らないことを「論争」というが、論争はしばしば紛争へと展開する。論争と紛争の境界はあいまいなことが多いが、両者は明らかに異なっている。論争はあっても紛争に至らないこともあるからである。しかし、論争は、紛争の源泉でもある。

現在ではほとんど用いられていないが、日本には、論争と紛争を包括する概

念が存在した。「相論^{そうろん}」という概念である。「相論」とは言い争うことであり、訴訟をも含む紛争を総称していた。言い争いのレベルから訴訟、さらに深い対立のなかにある紛争をも広く含むのが「相論」である。

動物たちが食物を争って対立するのは相論ではない。人間にも、食料の争奪のような紛争はあるが、土地に関して両当事者がそれぞれ権利を主張しあう場合のように、相論は、人間が言語活動をすることに伴う対立である。現代の国境紛争もまたこのような相論と考えることができる。

人間が社会生活を営んでいる以上、さまざまな対立を避けて通ることはできない。しかし、対立が解決不能な紛争や戦争に至ることは回避しなければならない。

紛争解決の手段が合意形成である。合意とは対立する両当事者の意思が一致することであり、一致する地点を求めることが合意形成である。しかし、利害の一致するところを見定めることはしばしばきわめて難しい。とくに当事者が自らの立場に固執し、自分の立場に固有の利害関係に立って権利を主張するならば、そしてもう一方の当事者も同じように主張するならば、紛争は深刻化する。かりに合意を得たとしても、両当事者の権利を折衷するかたちで、妥協的なものにしかならない。妥協的合意は、しばしば当事者それぞれに内面の屈折を生みだし、合意が意にそぐわないものであることで、不満を宿すことになる。それは解決のように見えて、しばしば新たな紛争の火種になる。

妥協的合意ではなく、問題の本質にまで迫って、対立する両者に満足のいくような合意に至るためにはどうしたらよいのだろうか。

「合意形成」という課題は、現代社会が直面する問題解決のための手段としてきわめて重要な意義をもっている。国際的な紛争だけでなく、日本の国内では、各種公共事業をめぐる紛争、たとえば、川辺川^{かわべがわ}ダムの問題、吉野川^{かこうぜき}河口堰問題、諫早湾^{いさはやわん}干拓問題、東京外郭環状道路問題など枚挙にいとまがない。もちろん、合意形成プロセスの問題は、これらに限定されるわけではない。いわゆる市民参加という形での行政と市民の間との協働で行われるまちづくりなどにおいても、合意形成の問題はきわめて重要な課題である。

そこで、いま挙げた具体的な問題群も念頭に置きながら、合意形成プロセス

の当事者どうしが対立するとき、その対立の融和を困難なものにしている「立場」というものについてさらに深く考察したいと思う。立場を拘束するものとしては、さまざまな要因が挙げられるが、人間の行動を規制するイデオロギーについても考察することができる。

*

対立を解決することができない理由のひとつは、当事者どうしが自分の立場に固執することである。真っ向から対立しあう主張で、互いに自分の立場を譲ることができないならば、妥協することさえ困難である。なんとかして妥協が成立したとしても、対立する当事者がみずからの立場に固執したままの妥協的合意は、当事者の間に不満を残し、あるいは相手に対する不信感を持続させ、新たな紛争を引き起こす。

「立場」とは、文字通り「立っている場所」であるが、ひとの置かれている地位や状況、またその人の面目なども意味する。さらには、物の見方のよりどころ、見地、観点、考え方でもある。

「立場」は「立っている場所」という意味であるから、人間が身体的存在であることにもとづく表現である。ところで、人間が立つのは脚によってである。古代ギリシア人が人間を「二本脚の動物」と言ったとき、この表現は他の四本脚や多足動物と区別するためであったが、動物学者としてのアリストテレスは、これを「二足歩行する動物」という意味で使っている。脚は歩行のための器官ということである。しかし、「立場」という概念は、「歩く」という運動ではなく「立つ」という静止の機能をふまえた表現である。立場とは、ある定常性、恒常性を表現するものであり、歩行のように運動を意味してはいない。ある一定の地点にとどまっていることが立場をとることなのである。建築現場で土地が軟弱なとき、「立場が悪い」と表現するのはこの意味である。

「立場」は「立っている場所」であるから、「歩く」や「走る」といった移動を意味してはいないが、「立場を変える」という表現にあるように、移動を含み持っているということもできる。立場を変えることによって、ものの見方も異なるよ

うに、移動することは経験の内容を変化させる。

さて、「立場」は、立っている場所という空間的表現から転じて、地位や状況でのあり方という意味合いも含むことになる。この意味でも「置かれている地位や状況」という表現にあるように、「置かれている」という空間的表現が用いられる。置かれるというのは、物体についても言われるが、人間の場合には、身体的な存在ということが意味されている。つまり、立場とは「身体を置いている場所」「身体が置かれている場所」という意味である。これらの表現は、身体と場所とが、相互に能動的でもあり、また受動的でもある関係性を表現している。わたしたちは、みずから選んでこの地球上に身を置いたわけではない。この意味で、「身体が置かれている場所」と受け身で表現する。しかし、同時に、わたしたちは脚を用いて地球の表面を移動することができる。どこに向かって、どのくらい移動したかということを選ぶことができるので、「身体を置いている場所」と能動的にいてもよい。繰り返すが、わたしたちがこの地球上のどこかに身体的配置をもっていることには、能動性と受動性の両方が含まれている。

地位についても、いま述べたのと同じような受動性と能動性が含まれていることはすぐに気づくことである。わたしたちはみずから選んで両親のこどもとして生まれてきたわけではない。しかし、両親の社会的地位や置かれた環境がこどもに影響を与えないということはほとんどありえない。この意味であらゆるこどもは受動的な存在である。その反面、わたしたちは、自分の人生を自分で選ぶことができる。わたしたちが、どのような地位に身を置くかは、そのつどの選択と決断の積み重ねによって決めることができる。立場は、みずから選ぶ地位や状況である。その意味で、わたしたちは能動性をもって自分の身をある地位に置くことができる。

以上のように、「立場」は受動性と能動性の両面をもっている。この両面性は、行為の価値基準についても語る事ができる。わたしたちは、ある組織に属するときには、その組織に組み込まれた価値基準によって行動することが期待される。このとき、組織の基準がその組織に属する個の基準となる。一人ひとり、組織に準拠し、組織の価値基準を自分の価値基準であるかのように振

る舞う。個人としての発言を期待される場で、しばしば「わたくしどもでは」といった表現が用いられるのは、組織の価値基準がそのひとの立場を拘束しているからである。自分の所属する組織を選ぶことは能動的な行為であるが、その組織の行動規範に従うことが期待されることには、一種の受動性が含まれている。

「立場をわきまえる」ことは、みずからの置かれた地位や状況を拘束しているはずの行動規範に従うことであり、「立場にこだわる」ことは、依拠する行動規範と置かれた状況との齟齬そごにもかかわらず、あくまで行動規範に従うことである。また、「立場に固執する」ことは、相反する立場の存在に対する一定の理解をも示しながらも、自らの地位や状況を拘束する規範にあくまで従おうと意図することである。他方、「立場を変える」「立場を超える」「相手の立場に立つ」「立場を捨てる」などの表現によって意味されるのは、このような立場が人間にとって選択の対象であることを示している。

第二次世界大戦の終戦以前に軍国主義者であったほとんどの国民が敗戦とともに突然民主主義者に転換したことは驚愕きょうがくすべき現象であったが、これを「立場を変えただけ」の選択として考えれば、理解できないことではない。ある「主義」を「立場の選択」として考えることも可能なのである。あるいは、社会主義革命を叫び、機動隊と衝突した多くの学生たちがバブル時代の企業戦士となっていったこともまた「立場」の選択のひとつとしても理解できるであろう。立場は選択の対象であり、しかも社会的な動向や趨勢すうせいによって、人びとの選択の傾向性としても存在する。イデオロギーもまた、このような立場によって選択されるものであることは、上の例からも明らかであろう。マルクスが経済的な基盤の上に立つ国家的な法制度や宗教、文化をイデオロギーとして考えたのは、イデオロギーが経済的な基盤そのものによって本質的に規定されるものと考えたからであったが、イデオロギーを「立場」から考えてみると、経済的な基盤の上に立つ人間の選択の傾向性として理解することができる。

社会主義イデオロギー対資本主義イデオロギーという形で、イデオロギーの対立ということから発展した対立と紛争では、相手の立場に立ったり、あるいは立場を超えた話し合いを行ったりすることが困難であった。冷戦構造の解消

が、イデオロギー間の合意によって実現したのではなく、経済体制の行き詰まりと社会システムの崩壊によって結果したことは、イデオロギーによる対立の解決が困難であることを如実に物語っている。

いま述べたように、立場を拘束する価値基準が一定の特徴的な価値観や世界観の一部となっているとき、その価値基準をたとえ一時的にも放棄することは難しい。ましてや、その価値基準が合理的な推理や考察にもとづくものではなく、内面的な信仰にもとづくものであったり、集団的な崇拜の対象であったりする場合には、その困難の度合いは増幅される。とくに、価値基準が人間や社会的関係の外部にあると考えられるとき、たとえばキリスト教やイスラム教のように人間社会を超越した神の領域に価値基準の根拠があると考え、そして、その価値基準に対する心的な態度が「信仰」であるとき、この対立は解決がもつとも困難なものとなる。宗教の違いによる対立と紛争の渦中にある人びとは、自分を拘束する価値基準を超えることができないからである。もちろん、このような宗教的な信仰に、近代社会の「民主主義」や「正義」が対立する場合にも解決困難な紛争が発生するであろう。

では人間は立場を超えることはどうしてもできないのだろうか。立場を超えてみる、相手の立場に立ってみる、というような要求は、不可能な要求なのだろうか。ここで「立場」というものをさらに深く考察するために、「配置と履歴」の概念を導入しよう。この概念は、人間がある主張を言い立てるとき、その主張の根底にある「立場」を相対化するのに役立つであろう。すなわち、どのようにすれば、ひとは立場を超えたり、立場を変えてものを考えてみたり、立場を離れることが可能になるのだろうか。

*

「立場」という概念について考えたときも述べたが、人間は身体的存在である。身体をもって空間のうちに存在している。身体は空間的なものであるから、人間は身体的存在であるというのと、空間的存在であるというのとは同じことである。空間のなかで一定の大きさを持ち、一定の形態を持ち、運動器官

によって運動する。その人間の身体が空間のうちに存在するとき、さまざまな事物や他の人間との関係が生じる。この関係それ自体も空間的なものである。そこで、事物や他の人間との空間的な関係性の全体を「配置」という概念で捉えようと思う。

人間は、ある時点でこの地球上に生をうけ、成長し、成熟し、老い、死んでゆく。死は人間から配置を奪う。そのひとはどこかに存在するものではなくなるのである。たとえ骨がどこかの墓地に埋葬されていたとしても、そのひとがそこに存在しているわけではない。それはその人の「遺骨」にすぎない。

人間は身体として地球の上に固有の配置を得ることによって存在する。固有の配置と人間の存在とを切り離すことはできない。したがって、この固有の配置は人間の本質の一部である。

個人が存在するための遺伝情報には、脚の形成に関する遺伝子が不可欠である。脚とは地球上を歩行するための器官であり、人間は動物としてこの器官によって自らの身体的配置を変換する。身体的配置の変換によって、人間は移動し、食物を得ることができるし、人びととコミュニケーションを交わし、社会的な仕事を行うことができる。

人間が固有の配置から世界を見るとき、固有の視点から見える世界の^{そうぼう}相貌は、その知覚の意識とともにそのひとの経験に蓄積される。経験の蓄積とは、一定の配置での経験の蓄積である。配置をぬきにした経験というものはない。したがって、経験にはつねに空間の経験が付随している。たとえ非空間的な情報の獲得であろうと、あるいは、非空間的な知識の習得であろうと、その情報の獲得や知識の習得は、たとえばある時、ある場所で見ただテレビからの情報であり、またある時、ある場所で読んだ本から得た知識であり、ある時、ある教室で教わった内容である。時間と場所の指定は、情報や知識の内容とは直接関わるものでないとしても、それらがあるひとの得た情報であり、あるいは、学んだ知識であるときに、時と場所の指定を排除することはできない。

科学的真理もまたこのような配置の拘束を受ける。科学的真理がある科学者によって発見され、学術雑誌に投稿されて受理され、社会に認知されるというプロセスは、どれも時空的な条件のもとに拘束されている。それは空間的でも

あり歴史的でもあるような出来事である。そのような空間性と歴史性の制約を受けない科学的真理というものはありえない。

歴史的制約をうけるものとして捉えられた配置は、その配置をもつものの履歴となって蓄積される。履歴とは配置の積み重ねであり、配置とは履歴の積み重ねによって到達した現在の空間的状态である。配置と履歴は相互に浸透しており、切り離すことはできない。

ひとりの人間が人間として存在するのは、それぞれに配置と履歴があるからである。人間にとっての存在とはこの配置と履歴にほかならない。

配置と履歴の人間観は、ごく当たり前の考え方のように見えるが必ずしもそうではない。たとえばプラトンの人間観によれば、人間は死後純粋な魂となって永遠に存在する。それは身体的な制約を受けない存在であるから、時空間的な限定のうちにはもはや存在しない。したがって、プラトンの人間観では、配置と履歴は人間にとって本質的なものではない。またデカルトの第一原理は、デカルト自身の配置と履歴の抹消という手続きによって到達したものであり、デカルトの「我」のうちには配置と履歴は含まれない。西洋的な近代的自我のうちには、配置と履歴は含まれていないのである。

配置と履歴の自我論で重要なのは、そこに含まれる受動性と能動性である。プラトンのような魂には、身体のもつ受動性は含まれていない。プラトンの魂は、純粋な能動性としての理性であり、外界からの刺激の受信としてのパトス(感情)すなわち受動性をもたないのである。しかし、配置と履歴には、個としての人間にはどうすることもできない受動性が宿っている。人間は自分の誕生を選択することはできないし、自分を生んだ両親を選択することもできないのである。自己の当初の配置は与えられるものであって、一種の宿命である。しかしこの宿命は同時に一種の偶然にも見える。

身体が受動性をもつ以上、生そのものもまた受動的である。自分はいつどこで生まれるかということのみずからの意思によって選択することはできない。どんな時代にどんな国に、そしてどんな信仰をもつ両親のもとに生まれるかによって、自分の配置と履歴の大きな部分は決定されている。この一種の偶然性が人生のスタートラインである。ある宗教を信仰する敬虔な家庭けいけんに生まれ

ば、両親は、その信仰をこどもにも与えようとするであろう。すると、宗教的信仰もまたその子の選択の対象ではなく、不可避的に与えられるものである。それはその子の受動性のなかに含まれている。

存在の不可欠な要素である受動性のうちには、ひとそれぞれに異なる内容が含まれている。裕福な家庭に生まれるのと、貧乏な家庭に生まれるのとでは、受動性によって規定される選択の条件もまた異なったものになる。裕福な家庭のこどもには、貧乏から抜け出すための努力という選択肢は存在しないであろう。したがって、受動性は能動的選択の際の選択肢の可能性を制限するのである。

配置と履歴のうちに含まれる受動性は、同時に、行為の方向性を決定するような規範を含むこともある。生まれつき敬虔な家庭に生まれたこどもは、自らの意思によってではなく、両親の教育やしつけによって、宗教的行為に対する傾向性を与えられる。宗教が人間と世界に対する一定の人間観や社会観、要するに価値観を与えるとすれば、そして、その価値観によってある考え方や主張を採用するとすれば、そのひとは受動的なかたちで、一定の立場に立つことになるであろう。この立場は必ずしもそのひとによって選択されたものであるとは限らない。生まれるのと同様に、配置と履歴のなかに組み込まれた行為規範だからである。

他方、ひとはそのような与えられた配置と履歴のなかに組み込まれた行為規範に準拠することによってだけ行為するわけではない。行為規範が内面化されるときには、つねに行為そのものの実行が伴うからである。行為は選択されるのであり、行為の積み重ねや思考によって新たな規範が採用される。つまり規範も選択されるのである。配置と履歴は、ひとの行為の基盤であるが、すべての行為を決定する要因ではない。そのつどの行為がひとの配置と履歴を書き加えていくのであり、このことによって、ひとは新たな局面に直面し、新しい選択肢をつくり出していく。

ある組織がなんらかの目的をもって活動するとき、そしてその目的に応じて行為規範が定められているとき、ひとはその組織の一員として規範を共有しなければならない。その組織が他の組織や個人と関わる時、組織を代表して

「わたくしどもは……」と言う。これが組織の一員としての立場を表現する。「わたくしども」は複数形であるが、ここでは一人称単数と一人称複数とが融合し、一致しているのである。個人の行為は同時に組織の行為である。このような「わたくしども」という表現は、自分の意思の表明であるというよりも、むしろ自分の立場の表明であることが多い。自分個人の立場の表明ではなく、ある組織の価値規範を採用するという個人の選択の表明である。

さて、いま述べたような組織の行為を規制する規範はいろいろ考えることができるが、組織や社会のメンバー全体に対し一定の強制力をもつようなものの考え方をイデオロギーと呼ぶことができるであろう。

配置と履歴は、立場上の選択肢を決定する要因にもなり、また個人がその選択を排除し、新たな選択肢をつくり出す根拠にもなる。ここで重要なのは、「配置と履歴」と「立場」の違いである。すでに述べたように、ひとは選択することなく、ある立場に立つことがある。また、特定の立場を意図的に選択したわけではないが、組織の一員であることを選択することで特定の立場を受け入れることもある。しかし、人間は、そういった受動性に依拠することなく、能動的に立場を選択する存在でもある。配置と履歴は、そのような受動性の配置と能動性の選択によって蓄積されることで、そのひとの選択の基盤を形成する。すなわち、配置と履歴は、過去の選択の帰結として存在し、また未来の選択の基盤として機能するのである。

立場の採用は、他者との関係を規定するから、この意味で、そのひとの未来の配置と履歴を導く要因となる。ただし、ある立場の選択が必然的にどのような配置と履歴を生み出すかということをあらかじめ予測できるかといえばそうではない。多くの場合、わたしたちは、ある立場を選択することによって、将来の配置と履歴を予測するのであるが、選択時には思ってもみない配置と履歴を結果として生み出すこともあるからである。たとえば、簡単に決着がつくと思われた公共事業の紛争において、反対の立場をとったことが、そのひとの一生の活動を決定してしまうこともありうる。

ひとは自分の配置と履歴から離れることはできないが、採用している立場を離れることはできる。配置と履歴は選択の対象ではなく、行為の選択の結果蓄

積されるものである。これに対し、立場はすでに与えられていることもあるが、しかし、その立場を離れることも、捨て去ることもできるのである。立場は選択の対象なのである。どんなに敬虔な信者の家庭に生まれても、その信仰から自らの身を遠ざけることはできる。実際に立場を離れることはできなくても、立場を離れて考えてみることはできるのである。ここに「立場を離れる」「相手の立場に立つ」「立場を超える」可能性が開かれる。立場を離れて、対立する相手の立場に立って考えてみる。相手の立場の根底にあるものを理解しようと試みることはできる。相手がどのような配置と履歴のもとにそのような立場を採用するに至ったかを思い測ることができるのである。配置と履歴から立場を切り離すことで、このような思考が可能になる。

*

相手の立場に立って考えること、立場を離れて物事を見ること、立場を超えて話し合うことの意味は、「配置と履歴」から「立場」を分離することによって理解することができる。言い換えれば、立場を離れること、自分の立場を拘束する行為規範や価値規範から離れることで、対立する相手の行為規範や価値規範の意味について理解しようと試みることができる。相手がどのような配置と履歴からそのような行為規範と価値規範を立場として採用するに至ったかということに思いを致すのである。このとき、相手の行為を拘束している行為規範がどこにあるのかということを知ることが重要である。たとえば、公共事業をめぐる対立で、市民と行政の立場が衝突しているとき、相手のとっている立場について考えてみることは、問題の本質を理解するのに役立つであろう。

成田空港建設のように、公共事業をめぐる対立がイデオロギーの対立をも巻き込むとき、その解決の難しさは極度に増幅される。人間観、自然観や世界観の対立は、立場を変えることを難しくするからである。墓地の建設をめぐるトラブルのように、宗教が問題にからむと、解決はもっと困難になる。なぜなら相手の立場を規定する価値根拠が信仰の対象であるとともに、しばしば人間と社会の外部に想定されることになるからである。立場を変えること、立場を超

えることは、そのような価値根拠からいったん離れることを要請する。

立場を変えて、あるいは、立場を超えて議論することの可能性を探る上で重要となるのが、立場を規制する行為規範の所在をさぐることである。いったい立場を拘束する行為規範をどのように捉えればいいのだろうか。

選択の場面において、行為規範の所在をあくまで人間と社会のなかに見ようとした哲学者として孔子とアリストテレスを挙げることができる。かれらは行為の選択を導く規範を考察するにあたり、人間を超える規範を求めることを拒絶し、あくまで「人間的な善」を追求しているからである。と同時に、かれらは、望ましい行為の根拠に中庸であることを求めている。孔子の説は、子思の『中庸』に述べられ、また孟子によっても展開されている。その中庸説はアリストテレスの中庸説とはまったく同じではないが、行為規範の所在をあくまで人間とその社会の内部に求めようとする点では一致している。

ここでは中庸説の意義を考察することで、立場の問題に対する考察を深めることにしよう。アリストテレスの中庸説は、行為が極端に走ることを回避するような内的な行為規範を一人ひとりが備えることを求める倫理論である。アリストテレスの理論は、一方で、行為の規範を個人内部だけに限定しようとするソフィスト的な相対主義、すなわち、自分自身が行為の基準であるという考えに対する批判である。ソフィストの相対主義は、他方で、利己主義をも内包する。他者に危害を与えないかぎり自己の利得を最大化してよいという近代的な功利主義もまたこのような相対主義的な発想の一形態として考えることができるであろう。無条件の利己主義に対する抑制の実現には、人間内部の行為規範ではなく、外的な法規範に求めることが自然だが、こうすると、人間はルールに従って自己の利得を最大化するだけの存在として捉えられる。外的なルールに従えばそれでいい、という行為原則は、ルールが適切に設定されていないと、ルール内では何をしてもいい、という欲望の解放を生み出す。欲望を自分でコントロールすることを要求する倫理規範は、ここでは居場所をもたない。アリストテレスが「善い行為を導く性行」としての「徳」を倫理学の根幹に据えたのは、そして、ギリシア人の考える徳のなかに「節制」が重要な意味をもつのは、個人が内面化されたみずからの規範にもとづく行為を行うことが人間的な

自由の根拠と考えたからである。ルールに従えば何をするのも自由という意味での自由ではない。

アリストテレスが行為の規範を人間の内面に求めはしたが、ソフィスト的な個人主義に陥ることを避けることができた最大の理由は、行為の価値根拠に対する社会的な賞賛と非難の重要性を認識していたからである。各人がそれぞれの内面的規範にもとづいて行為をするだけでは、社会的存在としての人間的善は達成されないという認識は、同時に、賞賛と非難という社会的行為のうちに規範の妥当性を保証することになる。この一見危うそうに見える規範原理は、アリストテレスがプラトンのイデア論的な価値論を批判したことからの論理的な帰結である。行為の価値根拠が人間と社会を超越したイデア的な世界に存在しなければならぬと考えたプラトンは、その出発点をソフィスト的な相対主義批判においていた。しかし、相対主義を批判するなかで到達したのは、その対極にある超越的な価値根拠を主張する立場であった。

アリストテレスの中庸説は、行為の規範としての徳を両極端の排除という形で理解したが、同時に、価値規範の存在を個人の内面に押しとどめる相対主義と社会の外部に置く超越主義との決別の表現でもあった。

他方、孔子のとなえた中庸説も極端な行為を回避するための原理という形をとり、しかも行為が外的な表現をとらない間は、その状態は善であるという性善説でもある。孔子を継承した孟子は、ひとのためには髪の毛一本も抜かない楊子の極端な利己主義と墨子の博愛主義を同根のものを見なしている。要するに、孔子とアリストテレスに共通しているのは、個人の内面に押し込められた行為規範と人間社会を超越した行為規範のどちらをも排除し、あくまで人間的社会のなかで行動規範を探究しようとする姿勢である。

わたしが中庸説を重要なものとする理由は、行為規範があくまで社会的な関係のなかで承認され、また非難されるべきだという考え方を基礎にしているからである。孔子の中庸説でもアリストテレスの中庸説でも、中国社会での、またギリシア社会での「徳」の重要性がうたわれている。しかし、これらの徳は、それを身につける一人ひとりの人間の行為とそれをとりまく社会のなかで機能するのである。

中庸説は、行為が行われる状況との関係のもとで、行為規範のあり方を捉えようとする。この点で行為規範をつねに根本的に不変のものとして考える原理主義とは好対照をなしている。孔子が一人ひとりの能力に応じた教育を行い、また置かれた状況に対応した適切な行為の存在を説いたのは、中庸説の採用と深くつながっている。

行為の基盤としての配置と履歴にもとづいて、立場は選択される。行為においては、みずからの配置と履歴にふさわしい行為の選択肢がそのつど考えられなければならない。他方、わたしたちは、配置と履歴を考慮することによって、それぞれの立場を相対化することができる。自分の配置と履歴と相手の配置と履歴を対照することで、相手をとる立場についての理解を進めることができるからである。これに対し、配置と履歴を人間にとって本質的なものと見なさない原理主義は、それを信奉する人びとの行為を強力に拘束するから、依拠する立場から離れることをきわめて困難にする。したがって、原理主義どうしの対立は、解決不能な紛争に陥りがちである。原理主義に真の意味で対抗するのが中庸説であるということもできる。

*

論争とそこから生まれる対立、そして紛争は、人間が個々の存在として経験を異にしていることから生じる。個々の存在としての人間は、生まれたときから受け入れなければならない配置と履歴をもつので、それを受け入れないかぎり、生きていくことはできない。しかし、人間は所与の配置と履歴に対して受動的に振る舞うだけではない。与えられた配置と履歴によって開かれる行為の選択肢を自ら選び、世界と新しい関係を構築していく。この関係にもとづいて、配置と履歴を積み上げていくのである。配置と履歴を直接選択するわけではないが、行為を選択することによって新たな配置と履歴を加えていくのである。

配置と履歴によって開かれる選択可能性のなかに立場も含まれている。どのような立場に立つかということが、モノや人びととの関係を構築する。立場に

よって意見が異なるという事態も生じる。そこで対立から紛争へと展開するわけである。

対立それ自体は人間にとって忌避^{きひ}すべき事態ではない。異なった意見のどちらかが問題に対する正解であるとは限らないからである。対立の克服のうちに第三の解答が発見され、その解決策の採用によって、事態の進捗が期待できるのである。したがって、問題は論争と対立をどのようにして人間の創造的な活動に結び付けていくかということである。

創造的な活動への道筋に、「立場を変えて考えてみる」「立場を超える」というプロセスがある。これが合意形成にとってきわめて重要なものであることは、立場上の対立がしばしば問題に対する大きな阻害要因となるからである。阻害要因を取り除くことが合意形成を進める上で、きわめて重要な課題となる。

立場を超えて議論する、ということを立場に拘束されたまま行うことはきわめて困難である。そこで、対立する立場を超えて議論を進めることができるような技術が求められる。このような技術は、行政と市民の対話プロセスにとって欠くことのできないものとなっている。合意に向かって話し合いを進めるためのファシリテーションである。

ファシリテーションにおいて、「立場」の概念はきわめて重要である。立場上の対立を超えたところに見いだされる一致点に到達したり、対立を克服できる価値意識を見いだしたりすることが合意形成の重要な課題である。立場上の利害調整や妥協を図ることが合意形成の目的ではない。このためにも、立場を超えて、対立を克服できる価値意識を見だし、あるいは構築するということが、さまざまな対立に彩られている現代社会の大きな課題である。

立場を超えたところにある価値、これをアメリカの合意形成に関する議論は、interest と表現している。これはしばしば「利害関心」と訳されるが、いい訳とはいえない。日本語の利害関心は、「立場上の」ものと考えられがちであり、またそのような言い方もなされるからである。では、interest はどう訳すべきだろうか。

すでに述べたように、それは「立場を超えて、対立を克服できる価値意識」と表現できるであろう。個別的な主張の場合には、その主張の根拠となっている

「理由」である。「あなたはなぜそのような意見なのか」「なぜそのような立場をとるのか」という「理由」の掘り起こしがそのような価値を見いだすために有効なプロセスである。「ダム建設に反対だ」という意見の理由を掘り起こせば、「環境が大切だから」という答えが返ってくるかもしれない。この理由は、同時に「孫の世代にもよい環境を残してあげたい」という将来の目標をも意味するかもしれない。このように、理由は、さまざまな他の理由とも深くつながっているであろう。立場上の意見の背景にある理由は、けっして単独で存在しているわけではない。理由のネットワークこそ、対立の背景にある価値構造を明らかにするための通路である。

さまざまな意見の理由の根底を形成する価値というものがありうるかということも問題である。わたしは、たとえば地球環境の保全といったことがそのような価値にあたるのではないかと考えている。その価値が維持されなければ、人間の存在そのものが維持されないからである。すでに述べたように、人間の存在の基盤は、一人ひとりの配置と履歴である。この配置と履歴の成立を不可能にするような要素こそ、価値の基盤の喪失である。

しかし、地球環境の維持というのは、ひとつの案にすぎない。地球が滅びたとしてもむしろ神に救済されることを選ぶひとに対しては、そのような信仰の立場を超えて議論してもらうことは至難のわざである。信仰の立場を捨てるように強制することはできない。その点で人間は自由である。サルトルのいうように、人間は自由であるように呪われているといってもよい。つまり対立と紛争のなかにいるように呪われているということである。克服できない対立のなかの立場に立つほど自由であるように運命づけられているからである。

人間は、対立と合意の間に揺れ動く存在であり、また対立と紛争から抜け出ることができないほど自由の身である。それでもなお、合意を求めようとすることは人間のめざすべき目標である。合意がめざすべき価値は、立場を超えて話し合いを進めるなかで現れてくる。「立場を超える価値とは何か」に答えることが、合意形成の課題なのである。

(出典：桑子敏雄『風景の中の環境哲学』(東京大学出版会、2005年))

〔注〕

- ・相貌：物事の様子。
- ・デカルトの第一原理：「我思う、ゆえに我あり」。デカルトは、あらゆることを懐疑したあげく、意識の内容は疑いえても、意識する私の存在は疑いえないという結論に到達し、これを第一原理とし、確実な認識の出発点とした。
- ・自我：認識・感情・意志・行為の主体としての私を外界の対象や他人と区別して言う語。
- ・パトス：苦しみ・受難、また感情・激情などの意。恒常的ではない代わりに、一瞬のうちに何かを生み出す契機となる。
- ・ソフィスト：紀元前5世紀頃、主としてアテナイで法廷弁論・修辞学などを教えることを職業とした人々。価値の相対性を説いた。
- ・性行：日常の性質とおこない。
- ・イデア：プラトン哲学の中心概念で、理性によってのみ認識されうる実在。感覚的世界の個物の本質・原型。また、価値判断の基準となる、永遠不変の価値。
- ・ファシリテーション：話し合いを円滑に進めるための技法。